

## 覚一本『平家物語』安徳天皇入水記事が示すもの

——厳島明神を介して、竜女、そして文殊菩薩へ——

小 林 加代子

はじめに

安徳天皇を奉じて都を落ちた平家一門は、壇ノ浦の戦いに敗れ海に沈んだ。『平家物語』諸本は、二位殿とともに海に沈む安徳天皇の姿を記している。

諸本は共通して、海に沈もうとする八歳の安徳天皇の姿が、黒くゆらゆらと背中を過ぎるほどの髪であったことを記している。二位殿は、「どこへゆくのか」と問う安徳天皇に、「極楽（あるいは西方浄土）へ」と答え、「波の下にも都」があるだろうと言って、ともに海に沈んだ。

諸本のうち覚一本を見てみたい。ゆらゆらとした黒髪姿で「私をどこへ連れてゆくのか」と問う安徳天皇に、二位殿は、次のように答える。君は、先世の十善戒行の力によって万乗の主としてお生ま

れになったが、悪縁にひかれて、運尽きられた。伊勢大神宮に暇申して西に向かつて念仏なざつたら、極楽浄土へお連れしよう。この二位殿の言葉の後に記される安徳天皇の姿は、「山鳩色の御衣にびんづらゆはせ給て」というものに変化している。そして、涙ながらに小さな手をあわせ、二位殿の言葉どおりの動作の後、二位殿に抱かれて海に沈んだ。

覚一本では、二位殿に抱かれた安徳天皇は、黒くゆらゆらと長い髪の毛の姿と、びんづらを結って山鳩色の御衣を着た姿と、異なる二つの姿がごく近い位置に並んで記されている。『平家物語』諸本は多く、ゆらゆらとした黒髪姿のみを記す。びんづら姿と二つの姿を並記することは、覚一本系本文の特徴と言えるものである。

この二つの姿に着目した花田清輝は『小説平家』において、後者が実は身替わりだったとする。花田の指摘は、富倉徳次郎『平家物

『語全注釈』に紹介されてもいる。富倉は、二つの姿は矛盾するものと見た。一方、生形貴重は、二つの姿は、『平家物語』の聴覚的受容を考慮すれば、矛盾するものではないとし、琵琶法師の芸術性の高さを示す例の一つとして評価した。すなわち、びんづら姿の童子とは、神仏が姿を現したものであるという斎藤慎一の論に肯つたうえで、安徳天皇を神童として莊嚴する覚一本の文芸性を評価する。

また、榊原千鶴は、覚一本が、『法華経』「提婆達多品」の童女成仏を安徳天皇に投影し、救済という主題に関わる意味を付与すると指摘する<sup>①</sup>。

二つの姿が、並んで記されたこと。富倉が矛盾と指摘した点に関して、生形論は、びんづら姿の安徳天皇を描き出した覚一本を評価するが、その直前にゆらゆらとした黒髪姿が記されることについては特段触れていない。また、榊原論についても、竜女との関連についてのみ言えば、覚一本に限らず、他の諸本も関連性があると解釈しうるものである。すなわち、ここにびんづら姿が記されていないことも、覚一本全体の主題としての救済が安徳天皇に投影されると見ることが、可能であろうと思われるのである。

本稿では、覚一本が二つの姿を並記することに対する解釈の可能性を探りたい。榊原が指摘するように、他の諸本同様覚一本も安徳天皇の入水に『法華経』「提婆品」を想起させうる。娑竭羅竜王の

八歳の娘、竜女は、文殊菩薩の入海教化によって、变成男子して往生を遂げた。しかしそれだけでなく、院政期から南北朝時代にかけて、神仏習合の理論化が盛んに行われる中で、童女と文殊菩薩は近づき、同体説が説かれるようになった。結論を先に述べれば、覚一本の二つの姿は、童女と文殊菩薩の両方を、安徳天皇一人に投影させていると見ることができると思われるのである。

#### 一 『平家物語』諸本における安徳天皇入水場面

安徳天皇入水場面については、富倉徳次郎『平家物語全注釈』に、諸本対照表が示され詳論されている。また、先行研究でも既に検討がなされており、屋上屋を架すことになるが、まずは改めて、覚一本『平家物語』巻一一「先帝身投」を確認しておきたい。

(一)二位殿はこの有様を御らんじて、日ごろおほしめしもうけたる事なれば、にぶ色のふたつきぬうちかづき、ねりばかまのそばたくはさみ、神璽をわきにはさみ、宝剣を腰にさし、

①主上をいだきたてまつて(傍線引用者。以下同)、「わが身は女なりとも、かたきの手にはかゝるまじ。君の御ともにまいるなり。御心ざしおもひまいらせ給はん人々は、いそぎつゞき給へ」とて、ふなばたへあゆみいでられけり。(二)主上ことしは八歳にならせ給へども、御歳の程よりはるかにねびさせ給ひて、

①御かたちつくしく、②あたりもてりか、やくばかり也。御ぐしくろうゆらくとして、御せなすぎさせ給へり。あきれたる御さまにて、「尼せ、われをはいづちへぐしてゆかんとするぞ」と仰ければ、(3)いとけなき君にむかいたてまつり、涙をさへ申されけるは、「君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御ちからによつて、今万乗のあるじと生れさせ給へども、①悪縁にひかれて、御運既につきさせ給ひぬ。②まづ東にむかはせ給て、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西方浄土の来迎にあづからんとおぼしめし、西にむかはせ給ひて、御念仏さぶらふべし。この国は心うきさかぬにてさぶらへば、極楽浄土とてめでたき処へぐしまいらせさぶらふぞ」となくなく申させ給ひければ、(4)山鳩色の御衣にびんづらゆはせ給て、御涙におぼれ、ちいさくうつくしき御手をあはせ、まづ東をふしをがみ、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、其後西にむかはせ給ひて、後念仏ありしかば、二位殿やがていただき奉り、浪のしたにも都のさぶらふぞ」となくさめたてまつて、ちいろの底へぞいり給ふ。

これを次の四点、(1)入水を決意した二位殿の言動、(2)安徳天皇の姿、(3)二位殿の言葉、(4)身投のありさま、以上に注目して、延慶本、屋代本、長門本、源平盛衰記の諸本を中心に比較を行う。

(1)で注目したいのは、まず、覚一本は安徳天皇を「主上」と記し、他の諸本は「先帝」と記していることである。また、富倉が指摘するように、覚一本では二位殿は主上を抱いているとあるのみだが、延慶本は、先帝を背負つて帯で強く結び合わせたと記している。屋代本、長門本、盛衰記も、背負っているか抱いているかの相違はあるが、延慶本同様結びつけていることを記す。

(2)は、屋代本では傍線部①②に相当する記述がなく、長門本、盛衰記は傍線部②に対応する本文がない。延慶本は、傍線部②に關連する本文を持ち、覚一本にない記述もあるので引用する。

先帝今年ハ八二成セ給ケルガ、(a)折シモ其日ハ山鳩色ノ御衣ヲ被召タリケレバ、海ノ上ヲ照シテミハサセ給ケリ。御歳ノ程ヨリモネビサセ給テ、(b)御貞ウツクシク、黒クユラ／＼トシテ、御肩ニスギテ、(c)御背ニフサ／＼トカ、ラセ玉ヘリ。

(d)二位殿カクシタ、メテ、船バタニ臨マレケレバ、アキレタル御気色ニテ、「此ハイツチヘ行ムスルゾ」ト仰有ケレバ、(略)

延慶本破線部(a)は、覚一本(4)と同じ装束である。延慶本は光の当たり具合によって色合いを変える玉虫色の麴塵の装束が、光を反射して海上を照らしているように記している。覚一本は、ここに装束の描写がないので、安徳天皇自身のうつくしきで辺りが照り輝

いとっていると読める。延慶本二重傍線部(c)(d)は覚一本にない。(d)は延慶本のみに見えるが、屋代本のように(1)のところ、「二所勁ク結付奉リ」とするものもある。(c)の髪がふさふさとしていたということは、長門本、盛衰記に見える。

(3)の部分は、屋代本「二位殿、『是ハ西方浄土へ』トテ、長門本「弥陀の浄土へぞ、我君」とて、盛衰記「二位殿は兵共が御船に矢を進せ候へば、別の御舟へ行幸なし進せ候」と簡略である。対して延慶本は、二位殿の安徳天皇への言葉と、天照大神、正八幡宮への言葉とを記している。次のとおりである。

「君ハ知食サズヤ、穢土ハ心憂所ニテ、夷共ガ御舟ヘ矢ヲ進ラセ候トキニ、極楽トテ、ヨニ目出キ所ヘ具シ進セ候ゾヨ」トテ、  
(a)王城ノ方ヲ伏拝給テ、クダカレケルコソ哀ナレ。「南無帰命頂礼天照大神正八幡宮、慥ニ聞食セ。吾君十善ノ戒行限り御坐セバ、我国ノ主ト生サセ給タレドモ、(b)未幼クオワシマセバ、善悪ノ政ヲ行給ワズ。何ノ御罪ニ依テカ百王鎮護ノ御誓ニ漏サセ給ベキ。今カ、ル御事ニ成セ給ヌル事、併フ(c)我等ガ累業一門、万人ヲ輕シメ朝家ヲ忽緒シ奉、雅意ニ任テ自昇進ニ驕シ故也。願ハ今生世俗ノ垂迹三摩耶ノ神明達、賞罰新ニオワシマサバ、設今世ニハ此誠ニ沈ムトモ、来世ニハ大日遍照弥陀如来、大悲方便廻シテ必引接シ玉へ。

覚一本『平家物語』安徳天皇入水記事が示すもの

今ゾシルミモス川ノ流ニハ浪ノ下ニモ都アリトハ」  
ト詠ジ給テ、最後ノ十念唱ツ、

この、延慶本の二位殿の和歌は、長門本、盛衰記にも見える。覚一本はそれを二位殿の言葉として記している。注目したいのは、覚一本傍線部①が「悪縁にひかれて、御運既につきさせ給ひぬ」と、外的条件を具体的に記しておらず一般的に読めるのに対して、延慶本は傍線部(b)(c)のように、安徳天皇のせいではなく、平家一門のせいであると記していることである。また、覚一本傍線部②については、東の伊勢大神宮を遙拝し、西の西方浄土に向かつて念仏をするようにとの、二位殿の安徳天皇への指示が記されるが、延慶本では、二位殿が王城の方を伏し拝んで言葉を発しており、誰がどこを向いたかが異なることは留意される。なお、この箇所は灌頂巻「六道之沙汰」と関連するが、これについては後述する。

(4)は、前述のとおり**のびんづら姿**を記すが、延慶本と山鳩色の御衣が共通する以外は覚一本系本文に独自の記事である。また、安徳天皇が実際に行為する姿が記されていることも特徴である。

諸本比較から見いだせる覚一本の安徳天皇入水場面の特徴は、既に生形が指摘するように、安徳天皇の神性を強調していることである。びんづら姿の他に見いだせる覚一本の特徴を具体的に挙げるならば、「先帝」ではなく「主上」と記すこと、安徳天皇のうつくし

さは辺りを照り輝かすばかりのものであったこと、主上といえども悪縁はいたしかたないこと、二位殿の言葉を聞いて涙ながらに遙拝し合掌念仏する安徳天皇自身の行為を記すことが指摘できる。

入水場面に関しては、生形が指摘するとおり、延慶本と覚一本とは文言の比較検討が可能であり、内容の方向性の違いが見て取れる。延慶本については、武久堅の論に詳しいのでふれない。覚一本は、安徳天皇を今上とし、その姿を二度も、しかも異なつた姿で記している。自ずからその印象は強くなる。また、海に入るのも、二位殿によって否応なしに海に飛び込まされているわけではなく、理解して剣を携えた二位殿とともに自ら海へ入つたように書いていると見受けられる。

なお、覚一本はこの入水場面を、灌頂卷「六道之沙汰」でも、ゆらゆらとした黒髪姿を記さない他は、ほぼ同文で記している。実は、覚一本が二箇所に記す入水場面は、『閑居友』下・八「建礼門院女院御庵に、忍びの御幸の事」に類似記事がある。

船に恐しき者ども乗り移り侍しかば、今上<sup>せみ</sup>おは人の抱き奉りて、海に入り給ひき。人く、或は神璽を捧げ、あるは宝剣<sup>た</sup>お持ちて、海に浮みて、かの御供に入りぬと名乗りし声ばかりして、失せにき。残れる者ども、目の前に命を失ひ、あるは、縄にてさまざまにした、め、いましむ。少しも情<sup>せま</sup>お残す事なし。今は

とて、海に入りなんとせし時は、焼石・硯など懐に入れて鎮にして、今上を抱き奉りて、まづは伊勢大神宮を拝ませ參らせ、次に西方を拝みて入らせ給しに、我も入なんとし侍しかば、「女人をば昔より殺す事なし。構えて残り留まりて、いかなるさまにても後の世を弔ひ給べし。親子のする弔ひは、必ず叶ふ事也。誰かは今上の後世をも、我後世をも弔はん」とありしに、今上は何心もなく、振り分け髪にみづら結ひて、青色の御衣を奉りたりしを見奉りしに、心も消え失せて、今日まであるべしとも覚えず侍き。(略)

これは、かの院の御あたりの事を記せる文に侍き。何となく見過ぐしがたくて、書き載せ侍なるべし。

『閑居友』と『平家物語』の関係については先行研究に譲りここでは論じない。覚一本に関して見れば、びんづら姿、山鳩色の御衣、今上とすること、<sup>③</sup>抱かれていたとすること、伊勢と西方を拝む行為等、共通する点が多い。覚一本が、『閑居友』が記すような『平家物語』以外の資料を引用して、従来からあつたゆらゆらとした黒髪姿の安徳天皇入水を記していた覚一本以前の『平家物語』に、記事を追加したと理解することも可能であろう。しかし、安徳天皇入水場面は、この場面のみで完結するものではない。先行研究が指摘してきたように、覚一本『平家物語』全体との関連をもつて理解する

必要があると思われる。

覚一本全体における安徳天皇入水場面を考えるうえで、次の二つの記事は特に重要である。一つは、諸本に共通する、八岐大蛇が人王八十代、八歳の安徳天皇に生まれ変わって剣を奪い返したという、覚一本では巻十一「剣」に記される記事である。この八という数は、後述する厳島明神との関連でも留意すべきものである。もう一つは、先行研究に指摘されるように、びんづらを結った童子は神仏の顕現した姿ということである。特に、覚一本には、巻三「大塔建立」に、清盛が厳島に皇子誕生を祈って叶ったという記事に加えて、清盛が、厳島明神から小長刀を授与されるという霊夢を見て現実に小長刀を得たという、その霊夢に厳島明神の使いとして記されたのがびんづらを結った天童であったという記事がある。延慶本、長門本、盛衰記では、内侍に託宣したとあって異同があり、びんづら姿の天童は覚一本の特徴と言えよう。

安徳天皇と、八岐大蛇、厳島明神との関連を考えるうえで、これも既に『平家物語全注釈』をはじめ、先行研究に多く指摘されるものであるが、厳島明神が安徳天皇として生まれたとす『愚管抄』巻五の記事は、やはり挙げておきたい。

其後コノ主上ヲバ安徳天皇トツケ申タリ。海ニシヅマセ給ヒヌルコトハ、コノ王ヲ平相国イノリ出シマイラスル事ハ、安芸ノ

覚一本『平家物語』安徳天皇入水記事が示すもの

イツクシマノ明神ノ利生ナリ、コノイツクシマト云フハ龍王ノムスメナリト申ツタヘタリ、コノ御神ノ、心ザシフカキニコタヘテ、我身ノコノ王ト成テムマレタリケルナリ、サテハテニハ海ヘカヘリヌル也トゾ、コノ子細シリタル人ハ申ケル。コノ事ハ誠ナラントオボユ。

抑コノ宝剣ウセハテヌル事コソ、王法ニハ心ウキコトニテ侍ベレ。コレヲモコ、ロウベキ道理サダメテアルラント案ヲメグラスニ、コレハヒトヘニ、今ハ色ニアラハレテ、武士ノキミノ御マモリトナリタル世ニナレバ、ソレニカヘテウセタルニヤトヲボユル也。

厳島明神は竜王の娘と伝えられており、安徳天皇となって生まれ、海に帰ったという。先行研究が指摘するとおり、『平家物語』諸本の背後には共通して、やはり安徳天皇を厳島明神の化身とする認識を想定する必要がある。例えば、百二十句本「剣の巻 上」に大蛇が「わが朝の安徳天皇と生まれ、八歳の竜女の姿を示さんかために、八歳の帝王の体を現して、かの剣を取り返し、深く竜宮に納めけるとかや」としていることなどは、八という数に引き寄せられて、『平家物語』諸本の背後にある認識が推し進められたかたちで本文に反映したと捉えることができるのではないだろうか。後述するように、厳島明神は、諸本において娑羯羅竜王の娘と記されるからで

ある。では、諸本における覚一本の特性とは何か。次に、厳島明神を女神とするか否かに着目して、覚一本を中心に諸本を見ていきたい。

二、厳島明神の性別をめぐる諸本異同

覚一本は、清盛が厳島を尊崇するようになった由縁を、中宮の懐妊記事に続けて次のように記す。覚一本巻第三「大塔建立」を引く。

〔一〕此御むすめ后にた、せ給ひしかば、入道相国夫婦共に、  
「あはれ、いかにもして皇子御誕生あれかし。位につけ奉り、  
外祖父、外祖母とあふがれん」とぞねがはれける。わがあがめ  
奉る厳島に申さんとて、月まうでを始て、祈り申されければ、  
中宮やがて御懐妊あつて、思ひのごとく皇子にてましまして  
こそ目出たけれ。

抑平家の安芸の厳島を信じ始られる事はいかにといふに、  
鳥羽院の御宇に、清盛公いまだ安芸守たりし時、安芸国をもつ  
て、高野の大塔を修理せよとて、渡辺の遠藤六郎頼方を雑掌に  
付られ、六年に修理をはしぬ。修理おはつて後、清盛高野への  
ほり、大塔をがみ、奥院へまいられたりければ、いづくより来  
る共なき老僧の、眉には霜をたれ、額に浪をた、み、かせ杖の  
ふたまたなるにすがッでいでき給へり。良久しう御物語せさせ

給ふ。「昔よりいまにいたるまで、此山は密宗をひかへて退転  
なし。天下に又も候はず。大塔すでに修理をはり候たり。(2)  
さては安芸の厳島、越前の氣比の宮は、両界の垂迹で候が、氣  
比の宮はさかへたれ共、厳島はなきが如に荒はて候。此次に  
奏聞して修理せさせ給へ。さだにも候はば、官加階は肩をなら  
ぶる人もあるまじきぞ」とて立れけり。此の老僧の居給へる所  
に異香すなはち薫じたり。人を付てみせ給へば、三町ばかりは  
みえ給て、其後かきつけやうに失給ぬ。たゞ人にあらず、大師  
にてましくけりと、弥たつとくおぼしめし、娑婆世界の思出  
にとて、高野の金銅に曼陀羅をか、れけるが、西曼陀羅をば定  
明法印といふ絵師に書せらる。東曼陀羅をば清盛か、むとて、  
自筆に書れけるが、何とかおもはれけん、八葉の中尊を宝冠を  
ばわが首の血をいだいてか、れけるとぞ聞えし。  
さて都へのほり、院参して此由奏聞せられければ、君もなの  
めならず御感あつて、猶任をのべられ、厳島を修理せらる。鳥  
居を立かへ、社々を作りかへ、百八十間の廻廊をぞ造られける。  
修理をはつて、清盛厳島へまいり、通夜せられたりける夢に、  
〔3〕御宝殿の内より髪ゆふたる天童の出で、「これは大明神の  
御使也。汝この剣をもつて一天四海をしづめ、朝家の御まはり  
たるべし」とて、銀のひるまきしたる小長刀を給はるといふ夢

をみて、覚て後見給へば、うつ、に枕がみにぞたつたりける。

大明神御託宣あつて、「汝しれりや、忘れりや、ある聖をもつていはせし事は。但悪行あらば、子孫まではかなふまじきぞ」

とて、大明神あがらせ給ぬ。目出たかりし御事も。

まず、(一)について、大塔建立記事の中宮懐妊記事に続けて記すのは、屋代本、長門本などである。延慶本、盛衰記は高倉院の巖島参詣のところに記す。(二)は、諸本いずれも氣比、巖島を、両界すなわち金剛界、胎藏界の神、あるいは垂迹と記す。(三)は、前掲のとおり、延慶本、長門本、盛衰記は、内侍に託宣したとあるところで、屋代本は託宣があつたとのみ記す。なお、長門本、盛衰記は、大塔建立記事の後に巖島の垂迹について記しており、長門本は「巖嶋大明神と申は、旅の神にまします。仏法興行のあるし、慈悲第一の明神也。娑羯羅龍王の娘、八歳の竜女にはいもと、神功皇后にもいもと、淀姫にはあねなり」とし、「本体観世音」とする。盛衰記には「御垂迹者、天照太神之孫、娑羯羅竜王之娘也、本地を申せば、大宮は是大日、弥陀、普賢、弥勒、中宮は、十一面観音、客人宮、仏法護持多聞天。(略)」とある。

(二)に関連する記事としては、覚一本巻第二「卒塔婆流」の次の記事がある。

「夫、和光同塵の利生さまざまなりと申せども、いかなりける

覚一本『平家物語』安徳天皇入水記事が示すもの

因縁をもつて、此御神は海漫の鱗に縁をむすばせ給ふらん」ととひ奉る。宮人答けるは、「是はよな、沙羯羅竜王の第三の姫宮、胎藏界の垂迹也」。

傍線部は屋代本も同様である。長門本は「まことに大日のれいち、しんこんひみつの浦とさう応せり」、「たうしや大明神は三十三の大小はんあり」と記し、大日の霊地であるとともに、本地を観音とする前掲記事と対応している。なお、延慶本はいずれの記事においても、巖島を娑羯羅竜王の娘とは明記しない。

ところで、覚一本巻第五「物怪之沙汰」は雅頼卿の青侍が見た節刀をめぐる神明の議定を記すが、巖嶋明神の性別に関する言及がある。以下に引く。

又、源中納言雅頼卿のもとに候ける青侍がみたりける夢も、おそろしかりけり。たとへば、大内の神祇官とおぼしきところに、(一)束帯たゞしき上臈たちあまたおはして、議定の様なる事のありしに、末座なる人の、平家のかたうどするとおぼしきを、その中よりおたててらる。かの青侍夢の心に、「あれはいかなる上臈にて在ますやらん」と、或老翁にとひたてまつれば、「巖嶋の大明神」とこたへ給ふ。(略)

なかにも高野におはしける宰相入道成頼、か様の事どもをつたへきいて、

「すは平家の代はやう／＼末になりぬるは。いつくしまの大明神の平家の方うとをし給ひけるといふは、そのいはれあり。

(2) たゞしそれは娑羯羅竜王の第三の姫宮なれば、女神とこそうけ給はれ。八幡大菩薩の、せつとを頼朝をたばうど仰られけるはことほり也。春日大明神の、其後はわが孫にもたび候へと仰られけるこそ心えね。それも平家ほろび、源氏の世つきなん後、大職冠の御末、執柄家の君達の天下の將軍になり給ふべきか「な」どぞの給ひける。(3) 又或僧のおりふし来たりけるが申けるは、「夫神明は和光垂迹の方便ま／＼に在ませば、或時は俗体とも現じ、或時は女神ともなり給ふ。誠に厳島の大明神は、女神とは申ながら、三明六通の靈神にて在ませば、俗体に現じ給はんもかたかるべきにあらず」とぞ申ける。

厳島明神の姿を、傍線部(1)の束帯姿の俗体とするのは、盛衰記が女房姿とする以外は諸本共通である。(2)について、延慶本は娑羯羅竜王の娘とは記さず、女神と聞くのに俗体に見えるのはよくわからないとしている。(3)は、屋代本、延慶本にはなく、盛衰記はそもそも女房姿であり当該記事もない。<sup>④</sup>長門本は、(2)に関して、厳島は胎藏界の垂迹で女体であるはずであるのに俗体となっているのは不思議とした後で、氣比、厳島は金胎両部であり、厳島には氣比が祀られ、氣比には厳島が祀られていて、金胎そろうようになっ

ているので俗体にも現じると独自の説を展開する。これと比較するに、覚一本は、厳島明神自体の神通力が優れているため、性別に関わりなく様々な姿に顕現するのだと記していることになろう。

以上から、覚一本は、厳島明神の書き方も特徴的であると言える。娑羯羅竜王の第三の姫宮とすることは、延慶本以外の諸本にも見受けられることだが、厳島明神の使いをびんづらを結った天童と記したり、三明六通の神通力を強調したりする。また、大塔建立記事や、安徳懐胎の記事の直後に記すことは、延慶本や盛衰記の記事配列とは異なるものであって、安徳天皇と厳島明神の近さを感じさせる。

諸本共通の認識として、『愚管抄』が記したように、厳島明神は竜王の娘であつて、安徳天皇となつて生まれたという理解が前提としてあつたと思われる。諸本は、内侍に憑いて厳島明神の託宣があつたとし、俗体姿の厳島明神に対する理解は覚一本ほど積極的ではなく、女神とする見方に基本的に沿つていると思われる。覚一本は、厳島明神を、胎藏界の大日であり、娑羯羅竜王の第三の姫宮であつて、さらに女性の姿に限らず様々な姿に顕現する神通力を持った神として記している。覚一本の安徳天皇入水場面は、覚一本全体との照応性を持つており、入水直前の二つの姿は、様々な姿に顕現する厳島明神との関わりにおいて、理解する必要があると思われるのである。

### 三 竜女と文殊菩薩

前掲の百二十句本が明記したように、人皇八十代、八歳の安徳天皇は、八岐大蛇の表徴としてだけでなく、八歳の竜女の表徴と、広く解釈される可能性を有していた。覚一本の安徳天皇の二つの姿も、ゆらゆらとした黒髪姿に八歳の竜女を、そして、院政期以降膨大な文字世界を生み出した神仏習合の文脈のありようの一つを投影した形象として、びんづら姿に、三摩耶形の一つを剣とし、八智を持つ文殊菩薩を透かし見ることが可能なのではないか。以下にその可能性を探る。

まず、大塔建立記事とも関わりの深い高野四所明神について見ておきたい。高野四所明神のうち、三宮と四宮は、氣比と厳島とされている。『高野春秋編年輯録』によれば、承元二（一一〇八）年に北条政子が寄進し行勝上人が勧請したという。だが、菅野扶美の論によれば、行勝による勧請も後代新たに創り出された話柄である可能性が指摘されている。高野と厳島の関係を考えるうえでは、『平家物語』諸本が記す大塔建立記事や、氣比は記さず伊勢大神宮と厳島を日本国の大日とする『古事談』巻第五などは、やはり留意されるものであろう。<sup>⑤</sup>

さて、この高野四所明神のうち四宮は厳島とされる。現存する図

覚一本『平家物語』安徳天皇入水記事が示すもの

像は、古いもので鎌倉時代から南北朝時代の作とされる正智院蔵本、金剛峯寺蔵本等があるが、いずれも琵琶を持ちびんづらを結った童子形で描かれている。<sup>⑥</sup>四宮の本地は弁才天とするのがふつうであり、『紀伊統風土記』『高野山之部』の四宮の本跡を記した箇所には、南山要集に「四宮〈同童形弁才天〉」、密教相承抄に「四宮〈弁才天王女女体〉」、賢宝遺告口訣に「三四の宮は共に女体」などがあることが紹介されている。また、これらに続けて文殊菩薩を本地とする説も紹介する。以下に引く。

或記に、丹生氏覚日房伝と標して、一宮〈本地〉（引用者注）  
〈内割注。以下同〉胎藏大日〈女体〉、二宮〈本地〉金界大日〈俗体〉、三宮〈本地〉千手観音〈女体〉、四宮〈本地〉文殊師利菩薩〈童子形〉と述たり（重義の両大明神口決に、一宮釈迦、二宮薬師といふ一説あり。又自性上人七卷抄に、丹生大明神天野本地釈迦也。御山胎藏大日也と云云）。此等に拠て考ふに、本地の説異伝ありと云とも、形影は大体現図に同く、三宮は天女形にて仏子を取、四宮は琵琶を撥せし二臂の弁天形なり。『紀伊統風土記』は、当該記事の末尾に「三宮の本地は千手観音、四宮は弁才天なることは諸説一同なり。覚日房の伝は四宮の本地文殊童形と注するは異伝なり」と述べており、或記が伝える覚日房伝の文殊菩薩説は、異伝であるとしている。一方で、四宮の図像はび

んづら姿で描かれることが多いのだが、びんづらは通常少年の髪型である。びんづら姿で琵琶を持つ童子の図像は、男女の別が曖昧である。そもそも童子という存在自体が性の曖昧さを持つということも可能であろうが、ここでは本地が何であるかということに関連している点が重要であろう。『平家物語』諸本が、巻第五「物怪之沙汰」において、厳島明神が女神ではなかったかと記していたことが思い合わせられ興味深い。

弁才天を竜女と同一と見ることは、既に多く論じられている。<sup>⑦</sup>『法華経』巻第五「提婆品」が記す、文殊菩薩の入海教化により竜女が变成男子して往生を遂げた話柄が、平安時代以降頻出する題材であったことは論を俟たない。が、中世の神道書には、この竜女と文殊菩薩を同体とする説があり、注目される。<sup>⑧</sup>『神祇秘抄』下を引く。

問、彼竜女者年始八才云々、其義如何、答、先表八大竜宮并  
文殊八智、文殊則竜女也、法花ニハ自一卷之文殊偈至三宝塔  
品無文殊名字、至提婆品乘千葉蓮花引竜女詣靈山見  
タリ、爰以、仏対二乗凡夫以説權教、為迹門方便也、於  
此時分、文殊八智隱而不現、以此位入卜竜宮云也、如上  
云、竜宮藏者其隱物之功云々、又仏対二十地菩薩等述フ示真  
実相ノ之旨ヲ、依之不生ノ妙智漸顯故、八智顯現ス、謂之文

殊引竜女、自竜宮詣靈山云々、是法花風法門也、今此竜  
女持乘宝珠者、仏本来所具八智法花八軸、表此義、暫ク依  
事法所獻宝珠ト経ニ説リ、理智冥合之故、成仏得道云々、故  
以文殊号ス釈尊九代祖師ト、以八智与所獻宝珠（現形）  
故也、密教意ナラハ金九会、胎九尊、九会之一印会ハ不二本来  
ノ珠、胎ノ九尊之中台モ亦復如此、次竜女事、反成男子  
云々、女体者十界表徳門、成男者不生法爾之体也、以顯不  
二ノ徳云三成仏ト、又無垢世界者、以字智水洗無始塵  
勞故、離諸着相、以之云無垢世界、南方者又宝珠方也、不  
空軌云、竜女得成無上竟、真言宗ノ最為殊勝（文）、  
この記事は、弁才天を不二の宝珠とする義を説いた箇所後に続  
く。弁才天とは竜宮の主で、三世諸仏が教えを説き主上を利益し教  
化する弁才をあらわすものである。仏の教えが滅尽するとき、この  
弁才は竜宮に帰り納まって、仏が後に出現する時、竜宮を出て梵天  
に至るといふ。そのうえで、右の記事は、竜女の年始八才とはどう  
いうことかと問い、答えに、八大竜宮と文殊八智をあらわすもので、  
文殊はすなわち竜女であるとする。文殊の名が、『法華経』の一卷  
の文殊偈に見えて「宝塔品」まで登場しないことを、弁才天が竜宮  
に納まって仏出世の時に出現することと重ね合わせ、文殊の八智は  
隠されていたが、「提婆品」に至って、竜女を率いて竜宮から靈山

へ詣ると説く。また、竜女の持つ珠は、仏本来所具の八智であり、八軸の『法華経』はそれを示すものであるという。

『神祇秘抄』は、中世の写本としては、真福寺藏本、高野山三宝院文庫本、高野山持明院藏本などが報告されている。真福寺藏本は、南北朝後半の書写の最古写本とされ、『古事記』の書写で知られる賢瑜の書写活動の所産と考えられている。賢瑜の書写活動は、その師である信瑜から受け継いだものである。信瑜は、南朝や伊勢神官の神官と結びつき、書写活動を行った。『神祇秘抄』は、真言宗の論理で神祇を説く書として、真言圏の複数の場で受容されたと考えられる。

高野四所明神の四宮の本地が、弁才天だけでなく、文殊菩薩であるという異伝を持つことの背後には、真言圏における弁才天と、一体をなす竜女と文殊菩薩とが、ともに、仏の教えそのものを象徴し、法滅時には竜宮に隠れ、仏出世の後の世に再び出現するという考えがあるものと思われる。

覚一本の安徳天皇の二つの姿は、こうした思想的背景をきわめて象徴的にあらわしたものと捉えることが可能なのではないだろうか。安徳天皇は、厳島明神の化身として生まれた。厳島明神は娑羯羅竜王の第三の姫宮、すなわち竜女であった。それだけでなく、覚一本では、竜女と一体とされた文殊菩薩をも一身に体現する存在として

覚一本『平家物語』安徳天皇入水記事が示すもの

記される。安徳天皇が海に沈んだことは、いわば法滅をあらわし、しかし同時に再び仏が出現する時には、竜宮を出て天上に至る。形が評価した覚一本の文芸性は、こうした論理を、きわめて巧緻な隠喩によって示し得たところにあるのではないだろうか。また、神原が指摘した、安徳天皇に象徴される救済とは、平家一門という過去の人々に対するものではなく、覚一本を享受する「現在」の人々に向けてのものであったと考えられるのである。

なお、こうした認識は、真言圏に留まるものではなかったと思われる。園城寺の護法神である新羅明神に関して次のような記事があるからである。『新羅明神記』上を引く。

一条院御宇、長徳三（丁酉）年三月、竜雲坊先徳慶祚大阿闍梨、（園城寺鎮守新羅明神）社務大友為泰、東向社壇改（南向）、（中略）抑当社太神者、海童（沙羯羅竜王也、依（一）男子之身（二）称（三）第三之子（一）、第二姫胎藏界大日、是則第三王子、安芸国厳島、之御託宣文曰、我是沙羯羅竜王第五姫也）第三之王子也、姉法華提婆之時、即身成仏、弟為（守）護三井仏（法）来給、新羅明神是也矣、

新羅明神は、娑羯羅竜王の第三の王子であって、傍注には「第三姫胎藏界大日」とある。第三の姫と王子と両方いたことになるが、姉は『法華経』「提婆品」で即身成仏した竜女であり、この弟は新羅明神であるというのである。新羅明神の本地は、文殊菩薩であった。ここでは、姉弟の関係となるのだが、竜女と文殊菩薩はきわめ

て近い存在として記されている。新羅明神を娑竭羅竜王の子とする説は、『古今著聞集』巻第一などにもある。また、『深風拾葉集』には、新羅明神を吒天とする記事が見えるが、吒天はまた弁才天と習合する。これらを考え合わせると、竜女と文殊菩薩を一体視することとは、天台圏においてもあったものと思われるのであり、宗派を超えた見方として、南北朝時代には存在していたと見られる。

おわりに

覚一本『平家物語』巻第一「先帝身投」に記される安徳天皇の二つの姿の解釈の可能性を探ってきた。覚一本は、諸本が共通して記す、ゆらゆらとした黒髪姿の安徳帝に加えて、『閑居友』と共通性を持つ文献から記事を追加したと考えられる。ただ、それは、素材の問題に終始するのではなく、覚一本の他の記事と照応する、覚一本全体のありように関わる改変となつている。覚一本の特性は、厳島明神を女神としてだけでなく、様々な姿に顕現する神と記したことであり、安徳天皇のびんづら姿もその範疇において理解できる。その根本には厳島明神が胎蔵界の大日であるという認識がある。つまり仏の教えそのものを象徴すると考えられる。この特性は、南北朝時代に記された『神祇秘抄』のような論理や、高野四所明神の本説等を背景として考えると、よく理解できるものである。すなわ

ち、八歳の安徳天皇は厳島明神であつて、厳島明神は弁才天や文殊菩薩を本地とする説があつた。安徳天皇の二つの姿には、「八」という数でつながる竜女と文殊菩薩を透かし見ることができるとは八軸の『法華経』をあらわしてもいる。竜女と文殊菩薩を一体と見るとは、法滅の世に仏の教えは竜宮に姿を隠すが再び出現して衆生を救うという、覚一本が書かれた「現在」に向けての救済の意味を持ち得るものであつた。

注

- ① 覚一本の安徳天皇入水場面に関して、次の先行研究を参照した。富倉徳次郎『平家物語全注釈 下巻(二)』(角川書店、一九六七年)、斉藤慎一「平家物語の人物形象をめぐって」(『国語科通信』第一九六号、一九七七年五月)、生形貴重『平家物語』の基層と構造——水の神と物語——(近代文芸社、一九八四年)、兵藤裕己『語り物序説(有精堂、一九八五年)、小林美和『平家物語生成論』(三弥井書店、一九八六年)、生形貴重『先帝入水伝承』の可能性——延慶本『平家物語』「先帝入水」をめぐって——(『軍記と語り物』第二四号、一九八八年三月)、榊原千鶴『平家物語 創造と享受』(三弥井書店、一九九八年)、武久堅『平家物語發生考』(おうふう、一九九九年)、田中貴子「安徳天皇女性説の背景——女と子供の成仏をめぐって——」(『日本文学』第五一卷第七号、二〇〇二年七月)、上横手雅敬「安徳天皇と後鳥羽天皇」(『海王宮』三弥井書店、二〇〇五年)、鈴木真弓「院政期の装束と安徳天皇」(『海王宮』三弥井書店、二〇〇五年)

② 永井義憲「閑居友の作者 成立及び素材について」(『大正大学研究紀要文学部・仏教学部』第四〇号、一九五五年一月)、水原一『平家物語

の形成』(加藤中道館、一九七一年)、麻原美子「閑居友」と『平家物語』——典拠説をめぐって——(『日本女子大学文学部紀要』第一九号、一九七〇年三月)、武久堅「壇ノ浦合戦後の女院物語の生成——『閑居友』と延慶本平家物語の關係・再検討」(『軍記物語の窓』第一集、和泉書院、一九九七年)、小島孝之他校注『新日本古典文学大系 宝物集・閑居友・比良山古人靈託』(岩波書店、一九九三年)等参照。

③ 前掲注①上横手論文が指摘するように、安徳天皇は廢位されていない。④ ただし、盛衰記は一字下げ記事に「或本云、嚴島大明神は、門客人を御使にて、白淨衣を著て參給て、御劍暫入道に預給へ」と被<sub>レ</sub>申と云云」と記す。

⑤ 高野四所明神に関して、次の先行研究を参照した。赤松俊秀「平清盛の信仰について」(『平家物語の研究』法蔵館、一九八〇年)、久保田収『神道史の研究』(皇學館大学出版部、一九七三年)、岡田光史「高野四社明神の内 氣比・嚴島両明神に対する一考察」(『密教学会報』第三七・三八合併号、一九九九年三月)、内田啓一「新出の高野大師四社明神画像について」(『密教図像』第二号、二〇〇二年一月)、『天野の歴史と芸能 丹生都比売神社と天野の名宝』(和歌山県立博物館、二〇〇三年)、『丹生都比売神社史』(丹生都比売神社、二〇〇九年)、菅野扶美「行勝上人」の語られ方と天野社四所明神」(『巡礼記研究』第七集、二〇一〇年一月)、遠藤徹編『天野社舞樂曼荼羅供』(岩田書院、二〇一一年)

⑥ 前掲注⑤「天野の歴史と芸能 丹生都比売神社と天野の名宝」による。  
⑦ 田中貴子『外法と愛法の中世』(砂子屋書房、一九九三年)、山本ひろ子『變成譚』(春秋社、一九九三年)、山本ひろ子『異神』(平凡社、一

九九八年)等参照。

⑧ 阿部泰郎「解題」(『真福寺善本叢刊 中世日本紀集』臨川書店、一九九九年)

⑨ 前掲論文注⑧

【使用本文】 ※表記は現行通用字体を用いた。また、一部本文を改変したところがある。

『平家物語』覚一本(日本古典文学大系)、延慶本(『延慶本平家物語本文篇』勉誠出版)、屋代本(『屋代本高野本対照 平家物語』新典社)、長門本(『長門本平家物語』勉誠出版、源平盛衰記(『源平盛衰記 慶長古活字版』勉誠社)、百二十句本(『新潮日本古典集成』、『閑居友』(『新日本古典文学大系』、『愚管抄』(『日本古典文学大系』、『紀伊統風土記』(『続真言宗全書』、『神祇秘抄』(『真福寺善本叢刊』、『新羅明神記』(神道大系 嚴島、『古今著聞集』(『日本古典文学大系』、『溪風拾葉集』(『大正新脩大藏經』